

熟年・高齢世代にとっての 近隣地域空間の意味

都市居住者の地域内行動と人的交流の実態から

文化女子大学教授

浅沼由紀



あさぬま・ゆき

文化女子大学造形学部教授。1958年福島県生まれ。東京工業大学大学院総合理工学研究所社会開発工学専攻修士課程修了。一級建築士、博士(工学)。武蔵工業大学建築学科客員研究員、文化女子大学助教授を経て現職。専門は建築計画学、住居学。主な著書に、『高齢者複合施設』(共編著、市ヶ谷出版社、2002年)、『新版福祉住環境』(共著、市ヶ谷出版社、2008年)など。

はじめに

壮年期から高齢期へ世代が移行すると共に、一般に心身機能は低下し、社会との接触機会も減少傾向にある。地域において豊かな老後の生活を営むためには、日常における基本的生活の質の確保が必須であるが、それに加えて地域社会との自然なふれあい、関わりをもって過ごすことが大切であり、そのような交流を育む場、交流を可能にする場が地域内に多種多様に存在することは近隣地域計画上重要である。

本稿では、筆者らの熟年・高齢世代の都市居住に関する一連の調査研究(表1)により得られた知見の中から、都市居住者の地域内行動とそれに伴う人的交流の実態を示しながら、この世代にとっての近隣地域空間(ほぼ徒歩圏)の意味について考察してみたい。

世代移行に伴う生活圏の変化

70代以上の方に聞き取り調査をしていると“ちょっと前まではやっていたのだけどねえ…”という過去形の言葉をよく伺う。個人差はあるが体力的な衰えが顕著になり始める70代になって、それまでの活動が継続できなくなってきた状況を示しているといえる。

筆者らの調査研究では、世代を3つの年齢層に区分(表2)し、各世代の特徴やエイジングによる移行に伴う変化を捉えてきた。壮年期から熟年期そして高齢期へと世代が移行していく中で、本人の心身状況や生活スタイルの変化、家庭内事情等で生活圏

表1 調査の概要

【調査A】

目的：居住歴を踏まえた現在の生活行動と人的交流の関係並びに交流の場の把握
 対象地：東京都中野区・江東区内の住宅地区
 対象者：50歳以上の戸建住宅居住者
 (53歳～91歳) (1次：32名、2次：9名)
 方法：訪問聞き取り調査
 時期：(1次) 2004年11月中旬～12月中旬
 (2次) 2005年10月中旬～下旬

【調査B】

目的：居住地域内で展開する屋外生活行動とそれに伴う人とのふれあい状況の把握
 対象地：東京都品川区内の住宅地区
 対象者：45歳以上の居住者
 方法：質問紙調査(訪問配布・回収)
 時期：2006年12月上旬～中旬
 回収率：71%(回収329名/配布464名)

【調査C】

目的：居住地域内での具体的な交流場面の把握
 対象地：【調査B】に同じ
 対象者：45歳以上の居住者12名(45歳～81歳)
 方法：訪問聞き取り調査
 時期：2007年10月下旬～11月下旬

域は変化し、総じて狭小化する傾向にある。このことは同時に、それまでの活動を通じて構築してきた様々な「縁」を喪失することにもつながる。【調査B】で昼間の在宅状況と外出行動範囲を尋ね、昼間の居場所による生活行動タイプを分類したところ、年齢層による違いが明確であった。世代の移行と共に、徒歩圏外行動が多く地域に不在がちなタイプから、自宅や徒歩圏内での行動が中心のタイプが多くなる。すなわち、熟年期に定年退職により社会との関わりが大きく変化し、会社を中心とした社会生活から、在宅し自宅を中心とした地域にいる時間が長くなる生活へと変化し、さらに高齢期には生活拠点としての住宅とその近隣地域空間の果たす役割は他の世代以上に重要となっていく。

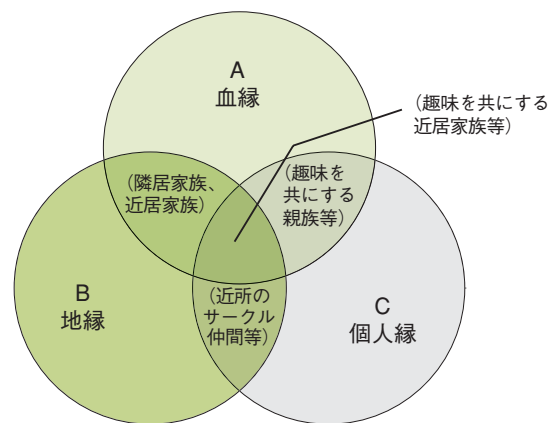
熟年・高齢世代が構築している3つの縁

では、熟年・高齢世代の人々はどのような縁を結

表2 世代の区分

世代(年齢)	特徴
壮年期 (45～54歳)	子育て・仕事現役で活動的な時期 身体機能にはやや老化現象
熟年期 (55～64歳)	子どもの独立・定年後の高齢期への準備期 身体機能が徐々に低下
高齢期 I (65～74歳) II (75歳～)	余生を楽しむ人生の完成期 身体的老化が進み健康問題が顕在化 健康問題が顕在化し自立困難へ

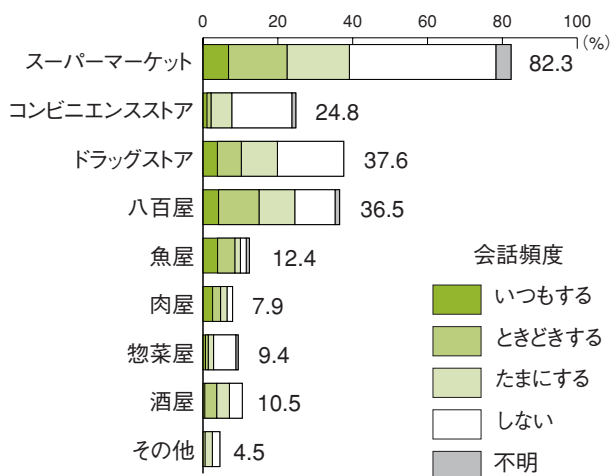
図1 血縁・地縁・個人縁の関係(概念図)



- A 血縁：血の繋がっている関係にある家族や親族
 B 地縁：同じ地域に住むことによってできた縁故関係
 C 個人縁：個々人の社会活動を通じてできた縁故関係
 ※3つの縁はそれぞれに重なり合う部分が存在する(一例を图示)。

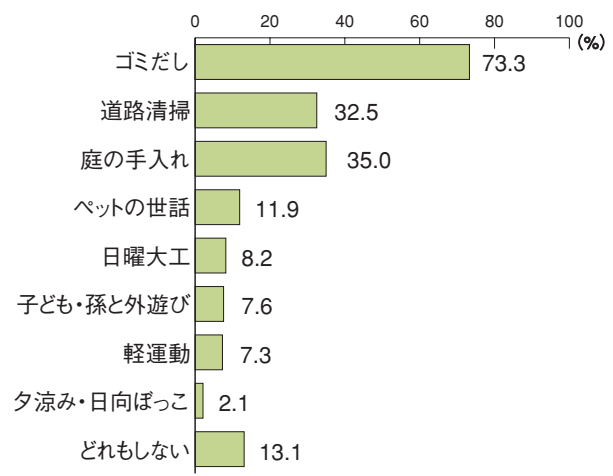
んでいるのであろうか。【調査A】で得られた具体的な交流事例を、交流相手との関係から「血縁」「地縁」「個人縁」に分類(図1)し、交流の内容やその行動圏を分析した結果、血縁では同居や隣居の場合には生活の質に関わるサポート関係をもつことも多いが、居住距離が離れると情緒的側面が強くなること、地縁では組織的な性格が強い町内会活動などは男性に、個人的なつながりが強い近所づきあいは女性にそれぞれ多いこと、地縁や個人縁では昔から継続している縁と退職後に形成された新たな縁があること、などが明らかになった。交流において、血縁

図2 ふだんの買い物先と会話頻度（複数回答）



【調査B】N=266（家近くで買い物をすることが多い人）

図3 自宅まわりでの行動（複数回答）



【調査B】N=329

→地縁→個人縁となるに従い個々人による選択性はより高いものになる。居住地域（地縁）の中でも、血縁、個人縁を結び、それまでの縁を継続していくことが大切であると思われる。

また近年は、一人暮らしや夫婦のみといった高齢者のみ世帯が増加し、血縁による生活面や情緒面でのサポートが得にくい環境にある場合も多く、近隣の血縁以外との交流に支えられて地域生活が成立している調査事例も多くみられ、高齢になるほど、隣近所との関係や近隣地域との関わりが生活の質に影響を与えることがわかった。

さらに、聞き取り調査で得られた同じ地域に住む熟年・高齢世代の徒歩圏内の外出行動を重ねてみると、商店街、公園、地区センター、神社、図書館などでは複数人による外出先の重なりがみられた。中でも商店街での買物や公園での散歩などをきっかけとした地域内の個人縁が、後に扶助的關係へ変化する現象などは、今後の近隣地域環境を整備していく上で注目したい事例である。

居住地域内での買物行動とそれに伴う交流

【調査B】においては上記のような明確な縁故関係による交流だけでなく、より広範囲な意味で社会と

の交接として、居住地域内での屋外生活行動に伴う会話の発生などのふれあい状況に注目して質問紙調査を行った。対象とした屋外生活行動は、基本的な行動である仕事、買物、診療、理容・美容、と自由時間での活動、ならびに地域内でのふれあいを想起させる行動としての飲食、銭湯、日課的行動、自宅まわりでの行動、地域施設利用、自治体サービスの利用・提供、についてである。本稿では、この中でも、特に買物行動と自宅まわりでの行動に注目したい。

居住地域での買物行動はそのほとんどが地域内の狭い範囲で行われており、屋外生活行動の中でも最も生活に密着した行動であると同時に、お店の人との世間話など、会話発生頻度も高い行動である。調査地は鉄道駅・購買施設が至近にある住宅地で、スーパーマーケットや個人商店などがそれぞれ複数存在し選択的行動が可能な地域である。ふだんの買物先としてはスーパーマーケットが最も多く8割以上が利用しており、次いでドラッグストア、八百屋がそれぞれ4割弱であるが、会話発生状況を見ると、調査地に隣接した商店街内の個人商店（八百屋、魚屋、肉屋）の利用者に会話をよくする人が多く、店の人と買物客との間に会話が生まれやすい場が形成されていると思われる（図2）。このことは、近所の

人の近況などの情報を得る手段として、「買物の店先で」は「道端で」「家に来た人から」に次いで多いことから一つの情報交換の場となっているといえよう。この商店街がアーケード付であり、昼間は歩行者専用道路となっていることも立ち話などがしやすい環境を形成している一因といえる。

自宅まわりでの行動と近隣交流

次に、自宅まわりでの行動時における近所の人との交流状況を見ると、「あいさつをする」7割弱、「立ち話をする」4割、「特に交流はない」1割強（複数回答）で、自宅まわりでの行動は近所との交流を促す上で、重要な生活行動であるといえよう。地域の人とのつきあい意識についても、「とても大切」と「まあ大切」を合わせて「大切」と考える人は8割以上を占め、高齢世代では特に「とても大切」の割合が高くなっていた。町内会活動や高齢者クラブなどの地域活動への参加意識は総じて低いが、互いに顔を見知ったご近所との日常的交流は都市生活においてもある程度存在しているといえよう。

自宅まわりでの具体的な行動（図3）として、「ゴミだし」は最も多くが行う行動ではあるが行動時間が短い。それに対して次いで多い「庭の手入れ」「道路清掃」や「ペットの世話」はある程度時間のかかる行動であり、草木やペットは言葉を交わすきっかけをつくりやすい特徴をもつため、居住者相互の交流を生み出すよい機会となる。近所の人々の近況情報を入手する手段として「道ばたで」との回答が多いこととも関連し、徒歩による移動や自宅前での行動場所としての道空間も交流の場として注目したい空間の一つである。

おわりに

ある程度の交流が生まれるためには行動の重なりや行動の集積など、時間的積み重ねが必要となる。居住地域とのかかわりを世代移行の観点からみると、壮年期には地域外行動が多いため地域内交流は比較的少ないが、熟年期では地域内での日常行動が多くなりそれに伴う交流もみられるようになる。しかし、より高齢になると地域内行動も低下し次第に交流機会も減少していくことから、心身の自立が困難化してきた時にも安心して住み慣れた地域の中で生きていくことができる人的支援体制を、元気なうちからつくっておくことが大切であり、そのような機会づくりに繋がる多種多様な交流を育む場を近隣地域に用意しておくことが求められよう。

都市には人口集積の結果として、徒歩圏内にも様々な施設が存在し、用意された多様なメニューの中から自分の価値観や要求に合った選択肢をそれぞれに見つけ出していくことが容易である。また都市の匿名性は特定の間人関係などに縛られることなく自由意志での選択性をもつ。さらに交通の利便性を活かして都心部にあるより専門性の高い施設へと足を運ぶなど、大きな自由時間を使ってのアクティブな活動が可能である。しかし一方で、生活拠点としての住宅とその周辺部における日常の営みの中で、互いの自宅まわりでの生活行動が重なり合うことで形成される近隣とのふれあいが自然なかたちで実現できる住宅地計画が必要である。

【参考文献】

浅沼由紀（研究代表者）「熟年・高齢期の在宅生活への人的支援を醸成する場の計画－在宅高齢者の継続的居住を支援する地域環境の構築に向けて－」平成16年度～平成18年度文部科学省科学研究費補助金基盤研究(C)(2)研究成果報告書、2007年